

## 『テストが導く英語教育改革 「無責任なテスト」への処方箋』

根岸雅史 著 (2017)

三省堂 180 ページ

杉内 光成

獨協埼玉中学高等学校

本書は、日本の英語教育において行なわれている「テスト」が抱える問題点を解決する道筋を示したものである。第1部では教員の現状を踏まえながらテスト作成の心構えについて書かれており、第2部では4技能と単語や文法のテスト作成のつぼについて詳細に説明されている。そして、第3部ではテストとCAN-DOリストとのつながりについて日本英語教育界が抱えている問題に触れながら、本書を締めくくっている。

まず、第1部は、実際の定期テストは測りたい項目を測れているだろうかという疑問を呈したところからテスト作成の心構えについての話が始まっている。中高の現場で働く教員は、定期テストをする理由について、「生徒の能力を知るため」「指導の成否を見るため」「生徒の診断をするため」「生徒に勉強させるため」などを挙げるが、実は「授業でやったことをきちんと覚えているか確認する」ことが本音なのでは、とも指摘している。また、本来は「英語力」を伸ばすために授業や教科書はあるので、テストでは伸ばしたい「英語力」が伸びているかを確認するために、教科書の本文ではない初見の英文を使用するのが適切ではないかと主張されている。さらにテスト作成の際に、テスト・デザインを考える必要性を主張している。最近の教科書にある言語活動の充実についても触れており、旧態依然とした形のテストから言語活動に合わせたテスト作成の必要性を訴えている。

第2部では、4技能ごとのテスト、文法テスト、単語テストの作成方法について述べられている。次にテストの実施時期について言及しているが、ここで注目したいのが、言語習得に絡めた考えだ。学校で行なわれている定期試験では学習直後の理解の具合を測っており、「わかる段階」しか見ていないのではないかとという問題点を指摘している。そこで、本書では、言語習得では「わかる段階」「使える段階」「使う段階」があるとし、ルールを「使える」ようになっているかどうか、「使う」ようになっているかどうかを測るテストも重要ではないかと提案を投げかけている。また、話は少し逸れるが、既製テストの利用に

についての言及もされている。既製テストは入試であれ、英検であれ、英語力の弁別や、設定された基準を達成しているかを測っている。一方、定期試験では指導や学習の成否を見ることが主目的である。よって、定期試験で既製テストを使用すると、その結果をどの評価規準として扱うのが問題になるのであると注意を喚起している。

第3部では、CAN-DO リストの作り方から始まり、リストの使用法、評価への生かし方などについて要点が凝縮されて説明されている。さらに、観点別評価にも触れており、この評価方法がもたらしたものと問題点について時系列に書かれている。観点別評価の歴史を垣間みることもできる。

特筆すべき点はいくつかあるが、教員の本音を明らかにしながらもテスト作成者としてあるべき姿への助言がなされている点は、教員という立場の人間にとって、自分を振り返る機会を与えてくれる。第1部第3章にて「自分のテスト問題は我が子のようなもの」と著者は言及しているが、まさにその通りではないだろうか。しかしそれでは、テスト作成における建設的な話し合いをできないので、「自分の書いた項目の正当な批判を受け入れる用意があることだ」とよい問題作成者の心構えを記している。また、教員がよく使用するテストのスタイルにも言及されている。例えば、第4章で取り上げられる多肢選択式テストだ。作成は容易であるので、忙しい教員にとっては多用されるが、テストイング・ポイントが不明確になる可能性があるので、測りたい能力を測れる弁別力を持った選択肢を考えることが必要不可欠であると言及している。第5章では真のコミュニケーション能力を測るために、なるべく現実的なコミュニケーションをテストの中で再現しようとしたコミュニケーションティブ・テストイングが注目を浴びているが、問題作成のためには、教師が日常的に英語をコミュニケーションのために使っている必要があるとも言及されている。

教壇に立つと誰もが経験するテスト作成であるが、理論に立脚したテスト作成に取り組んでいる教員はどれほどいるのだろうか。今一度、テストに対する教員のあり方を考えさせられる。